国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

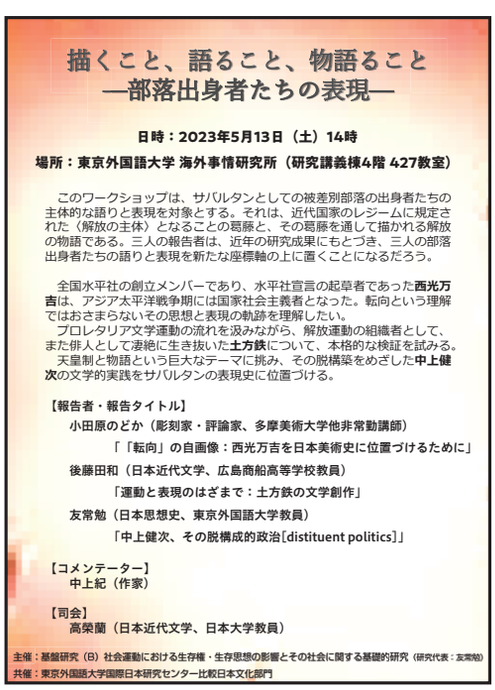
NEWSLETTER 東京外国語大学 Apr. 2024 No.33・34

国際日本研究センター第 33・34 号　目次

◆ ワークショップ「描くこと、語ること、物語ること―部落出身者たちの表現―」…… 1
◆ 夏季セミナー2023…… 2
◆ EACJS 報告 …… 2
◆ 第39回『外国語と日本語との対照言語学的研究』……3
◆ 2023年度第1回研究会「生成 AI で日本語教師の仕事はどうかわるか：変わる仕事と変わらない仕事」……6
◆ 市民連携講座・鵜飼哲講演会「パレスチナを〈考える〉」…… 7
◆ 社会連携講座「ファクト・チェックをめぐる意見交換会」……8
◆ 佐藤泉『死政治の精神史　聞き書きと抵抗の文学』(青土社2023年)書評会……8
◆ 第40回「外国語と日本語との対照言語学的研究」…… 8
◆ 2023年度 第2回研究会「大学における日本語教師養成と登録日本語教員制度」……11

【比較日本文化部門共催】

ワークショップ
「描くこと、語ること、物語ること
―部落出身者たちの表現―」
2023 年 5 月 13 日（土）



サバルタンとしての被差別部落の出身者たちの主体的な語りと表現を対象としたこのワークショップでは、近代国家のレジームに規定された〈解放の主体〉となることの葛藤と、その葛藤を通して描かれる部落出身者たちの解放の物語が、三人の報告者によってとりあげられた。

第一には、全国水平社の創立メンバーであり、水平社宣言の起草者であった西光万吉である。小田原のどか（彫刻家・評論家、多摩美術大学他非常勤講師）「「転向」の自画像：西光万吉を日本美術史に位置づけるために」は、アジア太平洋戦争期には国家社会主義者となった西光の、転向という理解ではおさまらないその思想と表現の軌跡について、その作品を通して考察した。

第二の後藤田和（日本近代文学、広島商船高等学校教員）「運動と表現のはざまで：土方鉄の文学創作」は、プロレタリア文学運動の流れを汲みながら、解放運動の組織者として、また俳人として生き抜いた土方鉄の本格的な検証が披露された。

第三の友常勉（日本思想史、東京外国語大学教員）「中上健次、その脱構成的政治 [distituent politics]」は、天皇制と物語という巨大なテーマに挑み、その脱構築をめざした中上健次の文学的実践を、島崎藤村『破戒』からの「部落問題文芸」の系譜に位置付けつつ、同時にサバルタンの解放 – 表現史に位置づける試みであった。

コメンテーターの中上紀（作家）、司会の高榮蘭（日本近代文学、日本大学教員）からは、それぞれの専門領域を踏まえて、三人の報告に積極的な介入がなされ、新たな知見に触発されることの多いワークショップとなった。参加者は 30 人。

（友常勉）

This workshop targets the proactive narratives and expressions of people from the discriminated Buraku people as Sabartan, three presenters, Nodoka Odawara (art criticism), Izumi Gotouda (literature), and Tsutomu

Tomotsune (history of thought, research on Buraku history), took up the struggle to become “subjects of liberation” as defined by the regime of the modern state and the stories of liberation depicted through such struggles by Buraku people.

夏季セミナー 2023
2023 年 7 月 21 日

夏季セミナー 2023 は、「日本語・日本語教育」領域を中心に構成した。

尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学）「ポストコロナ期における日本語教育と研究のあり方」は、ポストコロナ期において進展しつつあるオンライン教育について、仮想空間にアバターを取り込むメタバースを用いた教育などをまじえて紹介された。

谷口龍子氏（東京外国語大学）「コロナ禍の首相記者会見で使われる人称表現 ー「みなさん」に何を伝えたいのかー」では、語用論にもとづく社会的実践の研究として、コロナ禍での首相記者会見の冒頭演説に使用される人称表現と、発話文の発話機能との関連を視聴者がどのように理解・解釈するかについての分析が示された。

我妻潤子氏（株式会社テイクオーバル）「シン・日本語教師と著作権 ～ 4 つのケーススタディを通して」では、著作権の専門家であり、日本語教育関係者との共同研究も進めている立場から、今日の日本語教育における著作物の利用者と著作者双方の立場から見た著作権問題を、現在の状況（日本やほかの国）の紹介等、実践的な内容について講演していただいた。

アンドレイ・ベケシュ 氏（BEKEŠ Andrej、University of Ljubljana, Slovenia）「スロベニアと日本にまたがって――日本語教育と共に歩んだ 50 年――」では、日本語の談話や言語政策の専門家であり、ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の活動を長く推進して来られたベケシュ氏にご講演をいただいた。EAJS 運営のこれまでのご経験、さらに 2023 年年 11 月開催の東アジア日本研究者協議会（EACJS）国際学術大会・東京外国語大学大会での EAJS との共催企画についても紹介していただいた。

（友常勉）

The Summer Seminar 2023 was organized by academic field “Japanese Language and Japanese Language Education.” The lecturers and themes were as follows.

YounHo-Sook (Cyber Hunkuk University of Foreign Studies), “Japanese Language Education and Research in the Post-Corona Period”;

Ryuko Taniguchi (TUFS), “Personal Expression Used in the Prime Minister’s Press Conference on the Corona Disaster: What Do You Want to Tell ‘Everyone’?

Junko Wagatsuma (Takeoval Co., Ltd.) “New Japanese Language Teachers and Copyright: Through Four Case Studies”.

BEKEŠ Andrej, University of Ljubljana, Slovenia, “Spanning Slovenia and Japan: Fifty years of teaching Japanese”.

EACJS（東アジア日本研究者協議会）報告
2023 年 11 月 3～5 日

2023 年 11 月 3 ～ 5 日に東京外国語大学で東アジア日本研究者協議会第 7 回国際学術大会を開催した。国際交流基金を共催団体とし、また、国際日本文化研究センター、渥美国際交流財団、東芝国際交流財団からの支援も得た。同時に、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）との共同パネルも実現した。11 月 3 日のオープニングの基調講演・鼎談においては、「〈日本語文学〉の〈異他なる経験〉」と題して、エレナ・ヤヌリス氏（ベルリン自由大学）の基調講演と、多和田葉子氏（オンラインで参加）、李琴峰氏という二人の芥川賞作家と、比較文学研究者である翔丹氏（本学）の鼎談が行われた。また 5 日の特別講演では、「沖縄は東アジアの平和の「触媒」になり得るか」と題して、若林千代氏（沖縄大学）の基調講演と、それを踏まえた居原田遥氏（キュレーター）、上原こずえ氏（本学）、キムウネ氏（本学および明治学院大学）ら若手研究者たちの討論が交わされた。3 日間の大会では 30 を超えるパネルと 100 に近い個人報告が行われた。参加者は 320 名。また、次世代パネルなどに参加した若手報告者は 40 名であった。国際日本研究センターを中心にした大会実行委員会を組織しておよそ一年がかりの大会実現であり、成功裡に終えたことを報告したい。また、パネル・分科会のモデレーターとして、国際日本研究センターを中心に、本学の多くの教員の方々にご協力いただいた。心から御礼申し上げます。

（友常勉）

The 7th International Academic Conference of the Council of East Asian Japanese Studies (EACJS) was held at TUFS on November 3-5, 2023 (co-organized by the Japan Foundation).

The opening keynote speech was given by Elena Janulis (Freie Univesitat Berlin) on the theme of “Images Detached from Space and Time” followed by a trilogy discussion between two Akutagawa Prize-winning writers, Yoko Tawada (participating online) and Li Qinfeng, and comparative literature scholar Dan Shao (TUFS). The three-day conference featured more than 30 panels and nearly 100 individual presentations. There were 320 participants. In addition, 40 young presenters participated in next-generation panels.

【対照日本語部門主催】
第39回『外国語と日本語との対照言語学的研究』
2023年12月16日(土) 14:00 ～ 17:50

以下のとおり、研究会が開かれた。
発表者：山田洋平氏（東京外国語大学　専門：言語学）、土肥篤氏（東京外国語大学、専門：言語学）、竹内史郎氏（成城大学教授、専門：国語学）

発表の概要は以下のとおりである。

「モンゴル語の「形容詞」をどのように定義するか」
山田洋平氏

本発表ではモンゴル語の「形容詞」について、発表者による過去の考察をまとめあげ、とくに「良い・悪い」という意味タイプの語について形容詞らしさを論じた。発表者はこれまでに①形容詞らしい形態的特徴、②名詞らしさを示す形態的特徴、③修飾など文中での役割、という観点からモンゴル語における「形容詞」の特徴をコーパス調査に基づいて記述してきた。最終的に、これら 3 つの観点を総合的に見てもどれを典型的な「形容詞」と見做すかという十分な基準を見出すには至らず、あくまで個々の語の形容詞らしさがどのように記述されうるかという観点を提示するに留まった。

①形容詞らしい形態的特徴としては、強意・弱意と呼ばれる文法範疇のような要素を扱った。このうち -xAn という接辞は生産性も高く多くの用例が得られ、大小のペアを成す語の「小さい」意味の語に付されやすいなどの特徴が見いだされた。しかし他の弱意・強意の諸要素と併せ「形容詞」全体を特徴づけるような要素であるとは言い難かった。

②名詞らしさを示す形態的特徴としては、「形容詞」に格接辞がふされうるか、どの程度付されるかを調べたものであるが、調査途上のものであるので本発表では詳述を避けた。

③修飾など文中での役割として、「形容詞」の典型的な特徴は名詞を修飾することにあると考え、文中で実際にどのような役割を以て使用されるかという頻度を割り出した。モンゴル語の「形容詞」は一般的な傾向として修

飾語になるほかに述語としても用いられる。さらに特徴的な点として動詞を修飾する副詞的な用法があることも知られている。一部の語についてこうした役割または被修飾語の品詞を調べてみると、やはり「形容詞」として選出された語は多くが名詞修飾機能を有することが分かった。他方で、その頻度には偏りがあるものの、大なり小なり多くの「形容詞」には動詞修飾機能があることも示唆された。述語として用いられる用法についても「形容詞」ごとに頻度の偏りがあるが、述語としての用法は名詞述語の振る舞いとほとんど同じであると考え、ここでは形容詞らしい特徴としなかった。

以上を総合してみると、例えば「良い・悪い」という意味タイプの語について見れば、次のようなことが見出せる。出現頻度の高い sajn「良い」は出現頻度の低い oligtoj「良い」という語に比して形容詞らしさが低く見積もられることとなる。名詞的な特徴の見られる gol「主要だ」にも名詞修飾の用法でよく用いられる点は形容詞的であるし、名詞修飾の用法は少なめで述語としての用法でよく用いられる durtaj「好きだ」の扱いをどうすべきかなど、上記調査によって知り得た特徴の束からはうまく形容詞らしさを描き出すことができない。

（山田洋平）

'How to define "adjective" in Mongolian"'

This presentation discussed the past studies on "adjectives" in Mongolian, especially on the adjectival nature of "good/bad" type words. The Presenter has described the characteristics of Mongolian "adjectives" from the viewpoints of (1) Adjectival-like morphological features, (2) Morphological features that indicate noun-like character, and (3) Roles in a sentence, such as modification, he has described the characteristics of "adjectives" in Mongolian based on a corpus survey. In the end, the study was not able to find sufficient criteria to determine which adjectives are considered typical adjectives even when looking at these three perspectives as a whole, but only proposed a perspective on how the adjectival nature of individual words can be described.

「主文現象としての談話標識に関する日本語、イタリア語、ドロミテ・ラディン語の対照」
土肥 篤氏

本発表では、談話標識（discourse markers）または談話辞（discourse particles）等と呼ばれる諸表現の埋め込み文における分布について、日本語とイタリア語に加えて北東イタリアで話される少数言語であるドロミテ・ラディン語を考慮に入れて対照を試みた。談話標識は文が記述する出来事に対する話し手の心的態度を表し、通言語的あるいは汎言語的に存在するが、一方では個別の言語に固有の振る舞いを見せることが知られている。本発表ではイタリア語とドロミテ・ラディン語についてしばしば心態詞（modal particles）と呼ばれるような不変化詞と日本語の終助詞をとりあげて検討した。これらの表現は、前者が文中に現れるのに対して後者は文末に現れるが、一方でいずれも命題態度のモダリティや発話・伝達のモダリティと呼ばれるような言語伝達の側面と密接に関わる意味を持つことが指摘されている。

談話標識についてしばしば指摘される特徴は、これらの要素が埋め込み文において分布に制限を受ける主文現象（main clause phenomena）の一種であるということである。実際、たとえば日本語であればコト節など、談話標識を許容しない埋め込み文は容易に観察することができる。一方、とくにイタリア語やドロミテ・ラディン語では、談話標識を許容する埋め込み文も存在する。たとえば典型的には、イタリア語 se/ ドロミテ・ラディン語 sce "if" によって導かれる条件節には、談話標識を許容するものとしないものの対立が指摘されている。こうした分布はしばしば、埋め込み文そのものの性質の違いとして説明される。すなわち、典型的な埋め込み文は主文から独立して発話・伝達のモダリティを表現せず、したがってこのようなモダリティと関わる表現を許容しないとするものである。この分析によれば、一部の埋め込み文は主文と独立した発話・伝達のモダリティを有し、その結果として談話標識を許容する。

一方で、この分析は日本語における終助詞の分布を説明しない。終助詞の分布は明らかにイタリア語やドロミテ・ラディン語の談話標識よりも狭く、一部の動詞に導かれたト節を除いて全面的に埋め込み文から排除されるからである。本発表では、同様に典型的な談話標識よりも狭い分布を持つドロミテ・ラディン語の「疑問の小辞」と呼ばれる要素との比較からこうした分布の違いの説明を試みた。この説明によれば、埋め込み文における談話標識の分布には独立した発話・伝達のモダリティの有無だけでなく、個別の文の表す出来事と話し手の心的態度だけではなく、話し手以外の人間による心的態度をも表現した上でさらに話し手の心的態度を表現する、いわば二重構造の有無が関わっている。

A Comparison of Discourse Markers as a Main Sentence Phenomenon in Japanese, Italian, and Dolomite Ladin"

In this presentation, the presenter attempted to contrast the distribution of discourse markers or discourse

particles in embedded sentences in Japanese and Italian with that in Dolomite Ladin, a minority language in northeastern Italy. The discourse markers are the words that describe the sentences. Discourse signs express the speaker's mental attitude toward the event described by the sentence. While they exist in a colloquial or pan linguistic manner, they are known to exhibit language-specific behavior. In this presentation, the researcher examines invariants, often called modal particles, in Italian and Dolomite Ladin, as well as Japanese final particles. While the former appears in the middle of a sentence, the latter appears at the end; these expressions are pointed out to have meanings closely related to aspects of language transmission, such as propositional attitude and the modality of utterance and transmission.

A feature often pointed out about discourse markers is that they are a kind of main clause phenomena whose distribution is restricted in embedded sentences. In fact, it is easy to observe embedded sentences that do not allow discourse markers, such as koto clauses in Japanese, for example. On the other hand, especially in Italian and Dolomite Ladin, there are embedded sentences that allow discourse markers. Typically, for example, the conditional clauses derived from Italian se/Dolomite Ladin sce "if" have been noted to have a conflict between those that allow for discourse marking and those that do not. Such distributions are often explained as differences in the nature of the embedded sentences themselves.

講演

「文献日本語史で繰り返される統語的な変化を生み出すメカニズム―モダリティ接語、副助詞、ノ準体、格助詞ガ、係り結びにおける―」

竹内史郎氏

例えば「名詞＋らしい / ぽい / くさい」の語内部の名詞がおさまるスロットにおいて、屈折接辞 -u/-ta を節末とする節が置き換わることでモダリティ接語が形成される。このように、京都方言のモダリティ接語（ラシイ、ポイ、クサイ）が形成されるプロセスには

［名詞］-rasi-i →［屈折接辞を節末とする節］=rasi-i

［名詞］-kusa-i →［屈折接辞を節末とする節］=kusa-i

［名詞］-ppo-i →［屈折接辞を節末とする節］=ppo-i

という構造の変化があったと言うことができる（- は接辞境界を、= は接語境界を表す）。さらには、名詞にコピュラ接語が後接した「名詞＋やろ」における名詞位置に屈折接辞 -u/-ta を節末とする節が置き換わることでモダリティ接語が形成される。同方言のモダリティ接語ヤロが形成されるプロセスには

［名詞］= ヤロ →［屈折接辞を節末とする節］= ヤロ

という構造の変化があったと言うことができる。以上は、モダリティ接語の形成において名詞位置に屈折接辞を節末とする節が代入されるという変化を捉えたものである。さて、ホド、クライ、アタリという名詞はのちに副助詞へと変化することが知られているが、これらの名詞が副助詞になるプロセスにはそれぞれ次のような構造の変化があったと考えられる。

［名詞句［従属部 連体修飾節］［主要部 ホド］］→［名詞句［従属部 名詞］［主要部 ホド］］

［名詞句［従属部 連体修飾節］［主要部 クライ］］→［名詞句［従属部 名詞］［主要部 クライ］］

［名詞句［従属部 連体修飾節］［主要部 アタリ］］→［名詞句［従属部 名詞］［主要部 アタリ］］

すなわち、名詞句内の連体修飾節がおさまるスロットにおいて、名詞が、連体修飾節（すなわち屈折接辞 -u/-uru を節末とする節）に置き換わることにより副助詞が形成されると言うことができる。以上は、副助詞の形成において屈折接辞を節末とする節がおさまる位置に名詞が代入されるという変化を捉えたものである。

以上をふまえると、ノ準体の形成についてこれまでにない説明の可能性が生じてくる。ノ準体の発生の説明として、これまでノ付加説（信太知子「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」」『神女大国文』6、2006 年）や属格句類推説（坂井美日「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』11-3、2015 年）が提出されていたが、今回第三の説として示したのは、「名詞＋の」（「たぐひの」「初めの」「今の」など）における名詞位置に屈折接辞 -u/-uru を節末とする節が代入されるという説明である。名詞と屈折接辞を節末とする節との互換性を前提とするならば、ノ準体の形成におけるプロセスには次に示す構造の変化があったことが想定される。

［名詞］- ノ →［屈折接辞を節末とする節］= ノ

今後、さらに従来の説との比較検討を行っていく予定である。

講演では、このほか、主節において格助詞ガが出現するようになるプロセス、ゾによる係り結びが成立し展開するプロセス、そしてナリ構文が拡張するプロセスなどにおいても名詞と屈折接辞を節末とする節との互換性が関わるということに言及した。

名詞と屈折接辞を節末とする節との互換性は、マクロなレベルで認められる言語変化を引き起こす動機である。なぜなら、ある要素が屈折接辞を節末とする節に後接しておらず名詞に後接しているならばやがてそれは屈折接

辞を節末とする節にも後接できるようになる、あるいは、ある要素が名詞に後接しておらず屈折接辞を節末とする節に後接しているならばやがてそれは名詞にも後接することができるようになるからである（もちろん、一方が後接可能であれば他方もやがて後接可能となるということは無条件に起こるのではなく、そうなるための必要条件が別に考えられてよい）。こうした言語変化を促す力を 'noun-clause parallelism' と呼ぶならば、'noun-clause parallelism' は京都方言の歴史において繰り返され一貫して認められる形態統語的な変化を生み出すメカニズムだと言うことができる。

文献日本語史に携わる者に課されているのは、特殊な事柄や個別的な事柄を事実として連ねることだけではない。特殊な事柄の中に普遍を見出す、個別的な事柄から一般を見出すといったことも同時に取り組んでいくべき重要な課題である。

（竹内史郎）

オンラインによる参加者は 50 名を超え、質疑応答も多く大変盛況であった。文法の定義も含めて異なる言語の比較対照研究の可能性が示された有意義な研究会であった。

（対照日本語部門谷口龍子）

Lecture
"Mechanisms producing syntactic changes repeated in the history of written Japanese
Modality Suffixes, Adverbials, Nominalizer, Case Particles, Ga, and Engaging Knots"

The modality affix is formed, for example, by replacing the inflectional affix -u/-ta with a clause-terminating clause in the slot where the noun in "noun + seems/poi/kusai" fits. Thus, the process of forming modality affixes (rasii, poi, kusai) in the Kyoto dialect involves

[noun]-rasi-i → [clause ending in an inflectional affix] = rasi-i

[noun] -kusa-i → [clauses ending in inflectional affixes] = kusa-i

[noun]-ppo-i → [clauses ending in inflectional affixes] = ppo-i

We can say there has been a change in structure (- denotes an affix boundary and = denotes an affix boundary). Above is a description of the change in modality affix formation in which a clause with an inflectional affix as the clause terminator is assigned to the noun position.

This is because if an element is not postfixed to an inflectional clause and is postfixed to a noun, it can eventually be postfixed to an inflectional clause, or if an element is not postfixed to a noun and is postfixed to an inflectional clause, it can eventually be postfixed to a noun. If an element is not appended to a noun but to a clause ending in an inflectional affix, it will eventually be able to append a noun. If we call this force that promotes linguistic change 'noun-clause parallelism,' then 'noun-clause parallelism' is a recurring and consistent feature in the history of the Kyoto dialect. Suppose we call this force that drives linguistic change 'noun-clause parallelism.' In that case, 'noun-clause parallelism' is a mechanism that produces morphosyntactic changes that are repeated and consistently observed throughout the history of the Kyoto dialect.

Those involved in the history of the documented Japanese language are not only tasked with compiling a series of facts about specific or individual matters. Finding the universal and the general in the particular is also essential.

【国際日本語教育部門主催】
2023年度第1回研究会
「生成 AI で日本語教師の仕事はどうかわるか
:変わる仕事と変わらない仕事」
2023年12月18日(月) 17:40〜19:10
講演　李 在鎬氏
(早稲田大学大学院日本語教育研究科 教授)

東アジア日本研究者協議会（EACJS）第 7 回学術大会における李在鎬氏のパネル発表「日本語教育におけるフィー

ドバック自動化の可能性」（パネルセッション「日本語教育における『文型』あるいは Formulaic Sequence を考える」2023 年 11 月開催）に続き、今回の研究会では、豊富な研究事例と実証データ、それらの解説とともに生成型 AI の日本語教育への活用の可能性と教師の役割に関し、氏の分析、洞察が示されました。

講演の冒頭では、「住みやすい国」をテーマにした学習者作文例について ChatGPT4.0 が行った評価が示され、評価やその根拠の的確性が参加者に驚きを持って受け止められました。研究会参加者（94 名）全員にアンケート形式で質問を投げかけながら、日本語学習や指導において機械翻訳や生成 AI を活用することの是非やその根拠について参加者とともに検討を進め、氏の見解が経験や根拠とともに明瞭に語られました。例えば、①学習者が作文課題で機械翻訳や生成 AI 利用を行うことの是非は、課題の位置づけによって適切かが決まる、つまり学習の設定の問題であること、② ChatGPT も含め、さまざまな大規模言語モデル（LLM）の開発とその成果により非常に高い精度で言語の予測、言語の理解と生成が行われるようになったが、ChatGPT が「ウソ」をつかなくなる日は来ないと推測されること、といった点です。

今回の氏の指摘は、生活や教育の一部になり始めた生成 AI とは何者（何物）かを改めて知り、より具体的な自らと関連付けた生成 AI 等の技術利用の可能性を考える機会となりました。今後、さらに教育や学習の位置づけが問われると感じました。

（鈴木美加）

Following Jaeho Lee's panel presentation "The Potential of Feedback Automation in Japanese Language Education" at the 7th International Symposium of East Asian Consortium of Japanese Studies (EACJS) (Panel Session "Considering 'Sentence Patterns' or Formulaic Sequence in Japanese Language Education" held in November 2023), this time seminar, along with a wealth of research cases and empirical data, he presented his analysis and insights into the potential use of generative AI in Japanese language education and the role of teachers.

At the beginning of the lecture, ChatGPT4.0's evaluation of sample essays written by learner on the theme of "A Livable Country" was shown, and the participants were amazed at the accuracy of the evaluation and its reasons. While asking a questionnaire to all 94 participants, he discussed the pros and cons of using machine translation and generative AI in Japanese language learning and instruction and the rationale behind using machine translation and generative AI. Clearly, he explained his views along with his experiences and rationale. For example, (1) the appropriateness of using machine translation and generative AI in writing assignments depends on the position of the assignment, in other words, it is a matter of the learning setting, (2) the development of various large-scale language models (LLM), including ChatGPT, and their results have led to extremely accurate language prediction, language understanding and language generation. However, the day when ChatGPT will no longer "lie" is not likely to come.

His points provided an opportunity for us to learn anew who (what) generative AI is that has begun to become a part of our lives and education, and to consider the possibilities of using generative AI and other technologies in relation to ourselves more concretely. We realized that the positioning of education and learning will be further questioned in the future.

市民連携講座・鵜飼哲講演会
「パレスチナを〈考える〉」
2023 年 11 月 24 日、東京外国語大学：さくらホール
2024 年 1 月 26 日：日本キリスト教会館）
共催：「アハリー・アラブ病院を支援する会」

2023 年 10 月 7 日のパレスチナ武装勢力の攻撃と、それを契機としたイスラエルによるガザ地区とパレスチナの人々に対する空爆と〈ジェノサイド〉という状況を踏まえて、鵜飼哲氏（一橋大学名誉教授）による二度の講演会を開催した。第一回では「The New Middle East」という、新たな帝国をめざすイスラエルの軍事作戦の背景が、第二回目では思想運動としてのパレスチナ連帯運動についての豊かな議論が紹介された。いずれも参加者は 50 名を超え、盛会であった。

（友常勉）

Civic Collaboration Lecture・Lecture
by Satoshi Ukai
"Thinking about Palestine"

(November 24, 2023, January 26, 2024)Co-sponsored by strikes and “genocide” against the Gaza Strip and the Palestinian people, two lectures were held by Satoshi Ukai (professor emeritus at Hitotsubashi University). Both lectures were well attended, with over 50 participants.

社会連携講座
「ファクト・チェックをめぐる意見交換会」
2024 年 2 月 28 日
時事通信社会議室

時事通信社、AFP 通信社と共催で、エマニュエル・ピオニエ AFP 東京支局長の基調講演と、本学の久野量一氏（ラテンアメリカ文学）、青山弘之氏（シリア中東研究）、友常勉（日本思想史、モデレーター）の討論で、外務省、経産省、警察庁外事情報部など官公庁に呼びかけて「ファクト・チェックをめぐる意見交換会」を開催した。AFP が進めているファクト・チェックの国際的な取り組みを踏まえて、フェイクニュース対策について活発な議論が交わされた。

（友常勉）

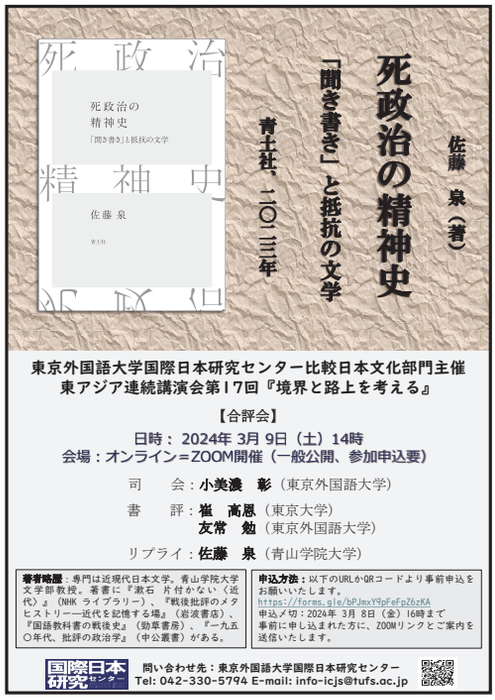
Social Collaboration Lecture:
"Exchange of Opinions on Fact Checking
February 28, 2024, Jiji Press Conference Room

Jiji Press and AFP co-sponsored a lecture by Emmanuel Pionnier, AFP Tokyo Bureau Chief, and a discussion by Ryoichi Hisano (Latin American Literature), Hiroyuki Aoyama (Syrian and Middle Eastern Studies), and Tsutomu Tomotsune (History of Japanese Thought, moderator) of the University, inviting government agencies, including the Ministry of Foreign Affairs, Ministry of Economy, Trade and Industry, and the Foreign Affairs and Information Division of the National Police Agency, to "The Exchange of Opinions on Fact Checking" was held.

【比較日本文化部門主催 国際ワークショップ】
東アジア連続講演会　第 17 回『境界と路上を考える』
佐藤泉『死政治の精神史　聞き書きと抵抗の文学』
（青土社 2023 年）書評会
2024 年 3 月 9 日
ZOOM によるハイブリッド開催

評者：崔 高恩（東京大学）、友常勉（本学）、
司会：小美濃彰（本学大学院博士後期課程）

佐藤泉氏（近現代文学研究者、青山学院大学教授）の新著『死政治の精神史　聞き書きと抵抗の文学』の主題は、森崎和江論を中心として、「日本近代文学」という制度的言説についての内在的批判と、「聞き書き」文学というジャンルの出現が有する可能性を通して、あらためて「文学史」



を生政治／死政治にくぐらせ、「抵抗の文学」を側置することにある。森崎にとどまらず、瀬戸内寂聴、吉田修一、柳美里、そしてベンヤミンの翻訳論までカヴァーされた先鋭的な批評を通して、濃密な議論が交わされた。参加者は 40 名。

Izumi Sato, “An Intellectual History of Death Politics
: Hearing and the Literature of Resistance”
(Seidosha 2023) Book Review Meeting
March 9, 2024 (hybrid session via Zoom)
Reviewers: Choi Go-Eun (University of Tokyo)
Tsutomu Tomotsune (TUFS)
Moderator: Akira Omino (TUFS)

The new book of Izumi Sato (Scholar of Modern and Contemporary Literature, Professor at Aoyama Gakuin), "An Intellectual History of Death Politics: Listening and Writing and Resistance," is a thought-provoking exploration of the possibilities of literary history. It achieves this by critically examining the institutional discourse of "Japanese modern literature" and exploring the potential emergence of the genre of "listening and writing" literature, with a particular focus on Kazue Morisaki's theory. The author's primary objective is to demonstrate these possibilities, which leads to a dynamic discussion between the author and the engaged audience.

【対照日本語部門主催】
第40回「外国語と日本語との対照言語学的研究」
2024年3月16日(土) 14:00 ～ 17:50
オンライン(ZOOM)開催

対照日本語部門主催、科学研究費基盤研究 B（代表：斎藤スニサー）共催による研究会「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語学的研究」（『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 40 回研究会）が、2024 年 3 月 9 日（土）14:00 ～ 17:50　オンライン（ZOOM）で開催された。

研究会の前半は基盤研究 B のメンバーが発表を行い、後半は山岡政紀 氏（創価大学：日本語文法論、語用論、二減額）による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。

The meeting entitled “Cross-linguistic Studies of Pronoun Substitutes and Calling Expressions” (The 40th Seminar “Contrastive Linguistic Studies of Foreign Languages and Japanese”), organized by the Contrastive Language Studies Division and co-organized by Grant-in-Aid for Scientific Research B (Representative: Sunisa Saito), was held on March 9, 2024, from 14:00 to 17:50 online (ZOOM).

科研の趣旨説明

本研究の対象となる現象は以下のような表現である。

「お母さん、お母さんの　お兄ちゃんの名前、何だっけ？」

呼びかけ　代名詞代用

代名詞代用表現（expressions of pronoun substitute）と呼びかけ表現（expressions of address terms）には重なる部分があるが完全に重ならない。そこで、どのような言語が代名詞代用表現や呼びかけ表現としえ使われるのか、小部源吾レベルと通言語レベルで観察する。また、各言語における代名詞代用表現の網羅的リストを作成し、さらに主要コーパスへの代名詞代用表現・呼びかけ表現のアノテーション付与も実施した。

（野元裕樹）

“Explanation of the purpose of the Scientific Research”

The phenomenon under study is expressed in the following way.

“Mom, what is mom’s brother’s name again?”

Calling out　Pronoun substitution

There is some overlap between pronoun substitute expressions (expressions of pronoun substitute) and call expressions (expressions of address terms), but only partially. Therefore, we will observe what kinds of languages are used as pronoun substitutes and expressions of address terms, both at the individual and common language levels. We also make an comprehensive list of pronominal pronouns expression in each language, and annotate the main corpus with pronominal pronouns expressions and invocations expression.

朝鮮語「朝鮮語における人称・呼びかけ表現の分布 - テキストタイプ・人称の観点から -」

南潤珍

話ことばコーパスと会話コーパスを対象に、テキストの種類、自称・対称・呼びかけ表現の分類、代名詞の使用という観点から分析した。

テクストの種類によって人称表現の使用頻度、代名詞代用の使用頻度が異なり、ドラマ台本が最も人称表現を多用し、代名詞代用も相対的に多く使っている。

また、自称・対称・呼びかけ表現別に代名詞代用の使用頻度が異なり、呼びかけ＞対称＞自称の順に非代名詞を使う頻度が高い。代名詞代用に用いられる名詞には、親族名詞、地位を表す名詞が多い。また、固有名詞＋親族名詞などで構成される句の使用も多いことが明らかになった。

「バリ語・ジャワ語における階級変異と呼びかけ語・代名詞代用」

三宅良美（秋田大学）

John Myhill（University of Haifa）

インドネシア語の映画のセリフや絵本などのでデータをもとに人称表現の使用を中心に分析を行った。その結果、全体的に、上位話者は、二人称代名詞をつかうが呼びかけ語やそれに準ずる表現も使わない。呼びかけ表現の人称代用は、社会、心理的親密さと関係するように思われる。母親から息子への呼びかけ表現の使用頻度と、父親から娘への呼びかけ頻度の違いがその状況を表していると推察される。

「インドネシア語の代名詞代用・呼びかけ表現について」

スリ・ブディ・レスタリ（立命館アジア太平洋大学）

インドネシア語映画字幕や自然談話録音データ対象に分析を行った。親族呼称や職業の呼称の中で代用表現として使えない表現（「息子」「運転手」など）があることが明らかになった。

「チベット系諸言語における敬称 -lags とその同綴形式：古典語から現代語へ」
和田有梧（名古屋大学大学院博士前期課程）

チベット系諸言語の敬語 lxgs,<lags> は、地域・時代により様々な用法がある。本研究ではその多義性の形成過程に類型論的・通時的な角度からアプローチを行った。
古典チベット語の <lags> の用例を星 (2018) の通時コーパスで収集し、敬称なのか、あるいは 呼格標識なのかについて考察した。これらは他言語の「敬称」と形態統語的振る舞いが異なり、呼びかけ表現の中だけに出現するという特徴がみられた。

「呼びかけ・敬称・対称の関係について」
野元裕樹（本学）

主格が敬称に転じたケースのあるタガログ語について紹介し、呼格（呼びかけ語）が敬称に転じる可能性をあげた。また、マレー語とインドネシア語の短縮形は呼びかけは可能だが、代名詞代用表現としての使用は不可である点を指摘した。

「発話機能の種類と自称詞・対称詞の明示化」
中村栞（上海外国語大学）・梅田里菜（本学）
谷口龍子（本学）

会話において自称詞や対称詞が明示化される場合に見られる言語形式や語用論的特徴を観察し、明示化の意図について考察することを目的に調査を行った。「日本語日常会話コーパス」（CEJC: 国立国語研究所 2022 年公開）から 84 会話を抽出、分析した。

その結果、自称詞や対称詞が表れた発話の発話機能の種類の結果は「話者の視点から見る世界の情報を示す場合は自称詞が使われやすく、聞き手に対して何らかの働きかけをする機能を用いる場合は対称詞が出現しやすい」という先行研究の結果とおおかた一致していた。自称詞や対称詞を明示化する必要がない場合に明示化された用例があり、それらの明示化の要因の 1 つとして話者が認識的権威・認識的優位性を感じている可能性があることの指摘は新たな

Yunjin Nam (TUFS): “Distribution of personal pronouns and invocations in Korean: from the viewpoints of text type and personal pronouns.

Yoshimi Miyake (Akita University) and John Myhill (University of Haifa): “Class Variation (caste) and Appellation and Pronominal Substitution in Balinese and Javanese”

SRI Budi Lestari (Ritsumeikan Asia Pacific University) “On pronominal pronoun substitution and invocations in Indonesian.

Yugo Wada (Nagoya University) “Honorific titles-lags and their allographic forms in Tibetan languages: from classical to modern languages

Hiroki Nomoto (TUFS) “On the relationship between invocations, honorifics, and symmetrical forms

Shiori Nakamura (Shanghai University of Foreign Studies), Rina Umeda (TUFS), Ryuko Taniguchi (TUFS) “Types of speech functions and the clarification of euphemisms and symmetrical verbs.”

講演
「発話機能論 (Speech function)
―会話研究における意義と展望―」
山岡政紀（創価大学）
専門：言語学・日本語学・語用論・人間学

山岡氏は、最初に日本語教育、日本語文法、談話・会話分析、発話行為 (speech act) について紹介し、ご自身が発案した発話機能とのラベリングの違いについて説明した。発話機能の定義は「対人的コミュニケーションにおいて、話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したものであり、聴者の存在が大前提であり主に話し言葉に関するものである」としている。最も混同されやすい発話行為と発話機能との違いについて発話行為が談話内で自立的であり一人称を基準とするのに対して発話機能は依存的であり二人称を基準とする点などの相違を説明した。

オンラインによる参加者は 50 名を越え、議論も活発であった。

（TANIGUCHI Ryuko）

Lecture Masanori Yamaoka (Soka University): Linguistics, Japanese linguistics, pragmatics, anthropology
Speech function: Significance and prospects in the study of conversation

Yamaoka first introduced Japanese language education, grammar, discourse and conversation analysis, and speech act and explained the differences in labeling with the speech function he invented. The definition of speech act is "a conceptualization of the interpersonal function that a speaker performs for the listener when he or she utters

a particular utterance in interpersonal communication and is mainly concerned with the spoken word, with the presence of the listener as the basic premise. He explained the difference between speech acts and speech functions, which are most often confused, in that speech acts are autonomous and based on the first person in discourse, while speech functions are dependent and based on the second person.

Over 50 people participated in the online session, and the discussion was very active.

【国際日本語教育部門主催】
2023 年度 第 2 回研究会
「大学における日本語教師養成と登録日本語教員制度」
2024 年 3 月 18 日（月）17：30 ～ 19：30
講演　北出 慶子氏
（立命館大学 文学部・言語教育情報研究科教授、文化庁登録実践研修機関及び登録日本語教員養成機関の登録手続き等の検討に関するワーキンググループ協力者）

国際日本語教育部門第 2 回研究会（オンライン）では、北出慶子氏を研究会講師にお招きし、「大学における日本語教師養成と登録日本語教員制度」というテーマでご講演いただきました。

講演では、① 2024 年 4 月より「登録日本語教員」が国家資格化され、「登録日本語教員」養成を行う機関は「認定日本語教育機関」として文科省認可を受ける手続きが必要になり、このような新制度により、日本語教師養成を行う大学や日本語学校、さらに、実習生を受け入れる機関にカリキュラムや連携体制の整備が求められること、②「登録日本語教員」を取り巻く環境を 3 段階（ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベル）に分けた捉え方ができること、教師養成プログラムのステークホルダー（関与する要因）である学生、担当教員、大学、日本語教育の現場、文化庁（4 月以降は文部科学省）の五者は各々置かれたコンテクストが異なること、③養成コースを受講する学生でも、「日本語教師」の職業を卒業後すぐの進路とする者が少ないこと、日本語教師になる上での障害として、日本語教師の職業の不安定さや待遇の問題、実習の機会が少ないことを挙げていること、といった点などが明瞭に示されました。現在の日本語教師養成コースが置かれた状況および課題が、調査データおよび関連理論を踏まえて明確化され、個々の参加者の腑に落ちる学びとなりました。講演の後に、新制度による影響や今後の養成コースのあり方などに関し、グループに分かれ、情報交換・共有がなされ、一個人、一組織だけではできない有意義なディスカッションおよび全体共有がなされました。オンライン Zoom 形式での開催により、日本国内外より 90 名を超える方の参加を得て、「登録日本語教員制度」および「認定日本語教育機関」に関連する複数の立場により検討する貴重な機会となりました。

（鈴木美加）

The 2nd Seminar on International Japanese Language Education (Online) invited Keiko Kitade to lecture on the “Training of Japanese Language Instructors at Universities and the Registered Japanese Language Teacher System “ theme.

The speaker will discuss the following points in the lecture: (1) In April 2024, “ Registered Japanese language instructors” will become a national qualification. Institutions that train “Registered Japanese language instructors” must obtain approval from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology as “accredited Japanese language education institutions.” The new system will require universities and Japanese language schools to train Japanese language instructors and institutions that accept trainees to develop curricula and cooperative systems. (2) The environment surrounding Registered Japanese language instructors can be divided into three levels (micro-level, meso-level, and macro-level), and the five stakeholders of the teacher training program (students, instructors, universities, the field of Japanese language education, and the Agency for Cultural Affairs (MEXT from April) are all in different contexts. (3) Even among students who take the training course, few choose the “Japanese language instructor” occupation as their

immediate career path after graduation. They indicated that the unstable nature of the teaching profession, the problems of remuneration, and the lack of opportunities for practical training were the obstacles to becoming a Japanese-language instructor. The current situation and issues facing Japanese language instructors were clarified based on the survey data and related theories, and the learning became clear to the individual participants. After the lecture, the participants were divided into groups to exchange and share information on the impact of the new system and the future of training courses, which provided a meaningful discussion and overall sharing that cannot be done by one individual or organization alone. The online Zoom format offered a valuable opportunity to discuss the "Registered Japanese language instructors' system" and "accredited Japanese language education institutions" from multiple perspectives, with more than 90 participants from Japan and abroad.

【近日開催のイベント】

◇ 東アジア連続講演会『境界と路上を考える』

NOE Young-Gi(韓国、朝鮮大学)講演

「韓国軍と5.18」

■ 日程:2024年6月25日(火)17時〜20:00

■ 開催形式:ZOOM(一般公開、事前申し込み要)

◇ 関 啓子氏講演会

『失語症を巡る話題、脳機能と音楽』(仮題)

■ 日程:2024年6月28日(金)18:00-19:30

■ 開催方式:ハイブリッド

(講義棟115教室・ZOOM)

(一般公開、事前申し込み要)

◇ 夏季セミナー2024

■ 日程:2024年7月24日(水)〜26日(金)

■ 開催形式:ハイブリッド(対面がメイン)

<プログラム>

7月24日(水)

9:30 - 10:30　Philip Seaton　(東京外国語大学)

New Frontiers in Japanese Studies

10:40 - 11:40　阿部 新　(東京外国語大学)

日本語教育機関認定法と日本語教師の国家資格化

7月25日(木)

9:30 - 10:30　曽秋桂 (台湾・淡江大学)

AI技術と協働したクリエイティブな文学研究

ー村田沙耶香の『コンビニ人間』を例にー

10:40 - 11:40　北出慶子 (立命館大学)

日本語教師教育の今までとこれから

ー言語教師教育における研究と実践の動向からー

7月26日(金)

9:30 - 10:30　LEE Yun-Jong (韓国・梨花女子大学)

Discreet Charm od Ero Banghwa:

South Korean Eroic Cinema in Relation with Japanese Pink Films and Hollywood Erotic Thrillers

10:40 - 12:10　特別公演

柴田勝二 (東京外国語大学名誉教授)

自作を巡る物語

ー『騎士団長殺し』と『街とその不確かな壁』について

◇ サマースクール2024

■ 日程:7月25日(木)、26日(金)

■ 開催形式:ZOOM

■ 内容:個人報告、パネル報告

■ 応募期間:5月25日〜6月14日

☆応募資格☆

日本に関する言語・文化・文学・歴史・社会のいずれかを専門分野として研究を行っている大学院生(応募・発表に際しては、指導教員の承認を得ること)

☆発表形式☆

・個人発表(発表時間20 分＋質疑応答10 分)

・パネル発表(90 分)

発行:東京外国語大学国際日本研究センター
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1　アゴラグローバル 2F
TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp
ウェブサイト URL jttp://www.tufs.ac.jp/icjs/